信如と一葉

塚田満江

一

樋口一葉が、作家としての本格的な創作力を示しはじめたのは明治二十七年十二月（文学界二十四号）の「大つごもり」あたりからで、続いて二十八年一月から同じく「文学界」に断続連載した「たけくらべ」が、二十九年四月に「文芸倶楽部」へ一括再掲されるに及んで、その作家的位置を不動のものとするに至つた。

この「たけくらべ」は一葉一代の傑作であるのみならず、明治期に於ける文学の一つの頂点であるとの評価は、今日に至るまでかわらない。

「われたとへ世の人に一葉崇拝の嘲を受けんまでも、此人にまことの詩人といふ称をおくることを惜しまざるなり。作中の文字五六字づつ今の世の作家に伎倆上達の霊符として呑ませたきもの」という「めざまし草」[1]（巻四）にのべられた森鷗外の絶讃を初めとして、性格描写の精細、構成の完璧さとそれを包む抒情的季感の美しさ、王朝風の流麗と西鶴調をとり入れた独自な風韻等々と、既にその文学的価値についてあますところなく言い尽されているごとくである。

特に、近代文学史上に占める位置を明らかにするために、女主人公美登利の性格、心理の描写の見事さは、作者の体験との照応を通してさまざまに検討され、当時の文壇に初めて認められる心理小説への方向を示すものとして、その近代的手法を高く買われている。たしかに美登利の心のうつりかわりは、思春期から女へと変つてゆく、しかも吉原という特殊な社会を背負つた少女の複雑微妙な相として、その内面のこまかいひだひだをあまさず捉えている点で珠玉のかがやきを放つていることは疑えない。

しかし既に村松定孝氏がその著「近代日本文学の系譜」[2]で指摘されているように、美登利如き少女は江戸時代の草双紙の世界によくある型で、性格描写の精細とは別個に旧時代的であり、もし近代的憂愁に充ちた信如の性格の創造がなかつたら、美登利はその本質的な古風さとかかわりないほどの生彩ある存在を示すことは出来なかつた、との解釈を、私もまた認めたいと思うものである。

つまり従来のこの作に与えられた特質の解釈への再検討の殿尾に付して、私もひとつの見解を述べ、同時に一葉文学を貫く本質へも迫り得たならば幸いであると考えた次第である。このことは既に拙稿「にごりえ」（国文学昭和三二年一一月参照）に於いて、その一端にふれた如く源七は一葉の分身なりをそのまま、信如は一葉の分身なりとの見地に立つて「たけくらべ」構想の内側から眺めてみるわけで、その結果一葉文学に対する私自身の観点を持ちたいと希つている。

具体的に言いかえれば、ひとつの文学作品の中核には作者そのひとのひそかなしかしひたむきな告白が秘められている意味で、信如に秘められた一葉の心奥の祈りを、結びの章に身代りに残された水仙の清浄無垢な花のいろと現実の羈絆を遠く去つて遊学の途にのぼつた信如自身の行為の中にこめられている、と観てゆきたいのである。

二

桃水と一葉の悲恋（それは一葉の側の一方的な感傷であつたにせよ）をふまえて「たけくらべ」は書かれ、したがつて信如は桃水を意中に創られたとするのは既に常識となつているが、それにしても「たけくらべ」に於ける信如の登場は、まことにさりげなくつつましい。髪かたち、容貌、衣裳と、鮮やかにしかもこまごまと書きたてられて華々しく登場する美登利に比べると、太陽と月、光と影ほどの違いがある。これは「にごりえ」に於ける朝之助の描写と比較すればより判然とするが。

信如を控え目に美登利を前面に押し出す対照的なこの扱いは終始変らないので、ときには信如の性情が判然としなかつたり、美登利に対してのみ作者の特別の配慮が籠められているかの如く思われ、桃水が一葉のひとり芝居に理想化された如く、信如もまた人間として男性としてほりさげが利かない、とかたづけられなくもない。勿論取扱いが消極的だからモデル説を打消すなどの短気な判断は問題外として、仔細に検討すると信如の人間的な苦悩が美登利の悲しみとは比較にならぬ深部にまで立ち入つて捉えられている事を発見すると同時に、この内気ではにかみやで常に懐疑的な、しかも人を愛する心が深ければ深いほど抑圧の厳

しさを己れに課せずにはいられないいたましい性格の、どこに桃水の分身を認めたらよいのか分らなくなつてくる。

女世帯の心細さに加えて迫つてくる窮乏へ対処する手段に、無我夢中ですがりよつていつた形の桃水への傾倒はさておき、一葉の理智が聞き知つた彼の人となりは、待合遊びと借金と大衆作家の堂々めぐりの中で、風采と人柄の中に往年の志士の面影と善意の人の思いやりとを持つた、いわばよくある日本の男の一人にすぎなかつた。桃水にも勿論、妻を亡い、弟妹の扶養、預かりびとのふしだら[3]など家庭的な人間的な悩みはあつたであろうが、それらは一葉の全く関わり知らぬ（桃水を愛憎の頂点においてのみ思いつづけた彼女が知ろうとしなかつた）面であつた。

また「いそがしきは大和尚、貸屋の取たて、店への見廻り」「朝念仏に夕勘定」の欲とふたりづれの信如の父親の経済観は、晩年の金もうけに及及としていた一葉の父につながるものがあり、「只利欲にはしれる浮世の人あさましく厭わしく、これ故にかく狂へるかと見れば……」（二六年八月十日の日記）との一葉の嘆きを、信如もまた切実に感じている。

姉ふじのゆるしのない結婚にふしだらの醜くさを教えこまれた一葉が、病的なまでに潔癖感を持つていたところは、そつくり信如の両親の結びつきや生活態度をあさましがる心理に投入されていよう。

美登利の親切を悪童共にはやされて「元来かかる事を人の上に聞くも嫌ひにて、苦き顔して横を向く質」の信如が「人の思はくいよいよつらく」思つてわざとのように美登利によそよそしくふるまうのも、そのまま萩の舎でたつた桃水とのあらぬ噂に（それは一葉自身が無邪気にふりまいたのでもあるがすべては無意識に行つたことで、したがつてなぜ友人や師から不当な非難を受けるかが納得ゆかないでより一層煩悶するわけである。）身も世もなく苦しんで、己が潔白を証するためにしやにむに交際を断とうと決意する姿にぴつたりと重なりあつている。

同じ萩の舎で「物つつみの君[4]」とあだ名された一葉は「生煮えの餅のやうに芯があつて気になる奴」と憎がられたこともあつたであろうし、「温順しさうな顔ばかりして、根性がぐずぐずして居る」と、信如とそっくりの陰口を叩かれたことも、利口でかんのよい彼女は見通しであつたろう。家の貧しさと娘の立場の弱さとが、自づから性格を内攻的な孤立的なものにしていつたことを身をもつて知つていた彼女は、信如の孤独な性情にひとしおの労わりを示しているのである。

即ち端麗な容貌と校内一の出来ぶりの総明さとを与えられ、どのように憎もうとしても憎み通すことの出来ない美登利の慕情をかきたてて、現実に愛を受けることのなかつた虚しさを、信如を描くことで一葉は救われようとした。

三

以上の引用は未だ作の一部にすぎないが、私なりに信如の背後にある一葉を見て来たのだが、ひきつづき他の例に入る前に村松氏の説に戻つてみたい。「たけくらべ」のプロットをたどつて信如の存在の重要性を述べた後、信如は「たけくらべ」に於ける源氏の君であり、一葉にとつて青春の思い出であつた桃水へのノスタルジーが此処に芸術的結実見たもの、と断じて、そうした信如の性格形成に直接的な影響を与えた人々として、厭世詩人透谷、藤村、秋骨、孤蝶、禿木らの「文学界」の青年文士のプロフィルを挙げている。この種の結論は、一葉の代表作中にようやく現われはじめた近代性への指向を説く人々が好んで採りあげる影響関係である。私もまた、桃水へのかわらざる思慕が「たけくらべ」の制作動機となつたこと、或いは人生の矛盾に充ちた環境の悲劇の中で懊悩する信如の姿に、明治のロマンチシスト達の憂愁の反映を認めることを憚るものではない。がしかし桃水への郷愁の結実とのみですませるには、全篇にゆきわたつているもののあはれ風の情緒は別として、信如そのひとはあまりに異質な少年の個性を示しており、交友の青年文士のもつ浪漫的雰囲気より生れたとするには、一葉自身の魂の彷徨がよりたしかに信如の内部を満していることも又無視し得ない。この証明は上述の引用のつづきとして詳しく挙げてゆくが。

文学界の人々との交わりといつても、主として馬場孤蝶、戸川秋骨、平田禿木等で、そのうちかなり親しくなつた川上眉山、斉藤緑雨などがいるが、一言で言えば社交的な表向きの接近のしかたであり、相倚る魂とか肉体の執着とかは無縁の、つまり人間的な交流にまでは到らない一種の雰囲気の醸成に役立つ程度のものであつたと思われる。

「罪と罰」を読んで感動したり若松賤子にひそかなファイトを燃やしたらしいのもこの頃であつたから、全体的になんとなく受け取つた西欧的な自我の影響はあるであろうが、信如の性格の根底をなす要素としては、一葉自身が幼少期から培いきたつた個の希願の中に、その半ば以上を指摘することも考えられぬことはない。

人は常に自分以外の生、他人の人生を体験してみたい欲望を抱いている。そのために文学は求められ、夢という救いが用意されている。小説の愛読者がふえ、自己の可能性を試したがるロマンチストの絶えぬ原因でもあるが、それは言うまでもなく作家たる素質の内部に缺くことの出来ない条件でもあるのだ。一例をあげれば女は男の生に憧憬

れ、男は女の生に限りない興味と関心を抱く。V・ウルフの言葉を借りるまでもなく作家がどちらが一方の性のみであるのは致命的でもある。

幼少期から利口でまけん気の文学少女だつた一葉が、誰よりも早く七つという年より読みはじめた草双紙のヒーローにあこがれ、武士の家のほこりに生きて来たかは「日記」にあきらかである。神西清氏が一葉の負けじ魂を江戸つ子気質をもつて説明するのを当を得ないとし、旧幕臣のはしくれとしての士魂を叩きこまれて育つたとしておられるのは正しいと思う。もつともその武士の家も大政奉還の前後にやつと御家人の株を買つてなつたものだが、これも又一葉の樋口夏子は預り知らぬことであつた。

父の事業の失敗、その死、兄の夭折と樋口家の悲運の度に彼女は歯ぎしりして、我男なりせばと悔んだことであろう。娘の立場の弱さ、女の力の限界を繰返して嘆く一葉の日記の書かれざる裏側に、男なり女ばの焦躁と発憤があつたからこそ「まことにわれはせなりけるものを何事のおもひありとて、そはなすべき事かは」（二九年二月二十日）の感慨が悲痛な訴えとして惻々と迫つてくるのである。

一葉の中の男子への指向と憧憬は、草双紙を耽読する単純な英雄崇拝や、桃水の「胡沙吹く風」の大陸雄飛の志士に夢中になつたりのたぐいから、簡単に女を棄てたり神がかり的なヒューマニストだつたりする未だ類型的な姿を経て、次第に自己内部の人間をわけた独自の男性像を作り出すまで根強く持ちつづけられてゆく。かく「大つもごり」以後の作品に至るまでさまざまの変化の過程を通つて、ついにひたすらに純粋に自らの信念に生きるために苦悩をよぎなくされる近代の男性像にふかめられるのである。

水仙を残して遊学の途に上る信如、小面憎い置手紙を残して女中を救つたともみせず飄然と去る「大つごもり」の放蕩息子、行動に封建の名残りはしみていてもともかくも恋に殉じて虚無に徹するところまで行つた「十三夜」の録之助、「にごりえ」の源七（拙稿参照）、一種の自我愛をつきつめた「わかれ道」の少年吉三、と一貫してみられるものは一葉が女の現実に果すことの出来なかつた自我の追求を、男性の姿を借りて徹底的に試みた跡なのである。

美登利もお力もしたいこと考えたいことを溢れるほど持ちながら、どう行為し如何に思考してよいか分らず、かんしやくを起してばかりいるが、信如にせよ源七にせよ、男たちにははつきりと具体的な目的と行為を示させている。その目的と行為は作品の世界で一葉自身がなしとげたものであることは断るまでもない。この世に自由に生きることを諦めた一葉は、作中の人間像をかりてその悲願を生かそうとした。同時に願望実現を阻む現実の圧力を身をもって

受け取っているために、作中の男性の運命も女性のそれに劣らず暗く沈みがちであった。

四

さて、ふたたび信如に帰る。

一葉が「物つつみの君」とよばれる自己抑制の不自然な処世法をとつたことは既にのべたが、こういう方法しかとれなかつたところに彼女の本質的な処世のまづさと気の弱さがあつたわけで、この徹底した形が「にごりえ」の源七となり信如の中にもいくつかの萠芽を見せている。両親の金儲け主義に対する徹底した嫌悪が原因であるにせよ、信如は義理にも人づき合いのいい方とは言えない。

内心は美登利にひかれながら自虐的なまでのはにかみと臆病さから、行為は逆につぎつぎと美登利の誤解と偏見を深め、そのためにいよいよ信如の怯じ怖れる気持が強まつて彼女の居る家の前を通るのさえ憚るように追詰められてゆく。

世間を怖れ自らの傾きがちな心におびえるあまり、桃水の店の前を内心は胸もつぶれる思いで表は素知らぬ態にゆきすぎる一葉の姿が、「二三軒下をたどりて、ぽつぽつと行く後影」「大黒傘を肩にして少しうつむいて居るらしくとぼとぼと歩む信如の後かげ」に浮びあがつてくる。

雨の日に大黒屋の寮のかどで鼻緒を切つた信如が、知らずに駈け出してきた美登利に「ふつと振返りて、これも無言の腋を流るる冷汗、跣足になりて逃げ出したき思ひ」や、「わなわなと慓えて顔の色も変るべく」なるあたりになると、もはや文学界の人々ははるかにかすんで、一葉そのひとの桃水の前にある、いじらしいすくみ方になつてしまう。（むしろ、例えば平田秀木の人柄などは正太の方に移されていると私は思うが、このことは又稿を改めたい。）二十六年二月二十三日の日記には、桃水のふいのおとづれに「胸はただ大波のうつらん様」「いふべき事も覚えず、問ふべき事も忘れて、面ほてりのみいと堪がたし。」ともあって、まして、このいたましい焦躁の姿から桃水の少年期への連想をさかのぼらせることは全く不可能である。つまりは一葉そのひとのあるひとときの奇妙な屈辱感と異常な差恥の念の凝縮が、美登利との対決の場に於いて活写されていると言えよう。

さて信如の身代りに残された水仙の花言葉を一葉は知るよしもないであろうが、「淋しく清き姿」にひめられた冷いおごりの心を彼女もまたその内側に息づかせたと言える。

幼くしてすでに「我身の一生世の常にて終らむことのなげかはしく」と志を立てた一葉は、苦心さんたんの末文学の道を開き得た喜びを「我れは人の世に痛苦と失望とをな

ぐさめんためにうまれ来つる詩の神の子なり。をごれるものをおさへ、なやめるものをすくふべきは我がつとめなり。されば四六時中いづれのときか打やすみてあらんや。我がちを盛りし此ふくろ破れざる限り、われはこの美を残すべく、しかしてこのよ、ほろびざる限り、わが詩は人のいのちとなりぬべきなり」とほこりたかく書き残している。

一葉のナルシズムはすがりついている母も妹も樋口家なるものもふりすてて、ひとすじに作家道に徹することにあつた。しかも一葉は同時に、武士の娘として純粋に生真面目に潔癖に生きようとした。作家精神の豊満自在かつ厳正非情と、一葉の幼いほどのむきなひとすじな生き方とが一致するかどうかは、軽々に判断は出来ないが、一葉の世にない今から考えれば、一葉の生は相容れざる二つに分れたまま相容れざる哀しみを文学の世界に訴えるに終つたといえよう。

即ち「たけくらべ」に於いては作家への夢は何がしの学林にゆく信如に托され、一葉の理想の愛は水仙の作り花ひとつに示され、現実の一葉は暗い運命の羈絆の場に美登利と共に残されたのである。

現実の場にあってはこれほど確然と乖離する運命にある一人の人間の個の矛盾が、天与の麗筆に支えられて、渾然一体となっているところに「たけくらべ」の不思議な魅力を感じると同時に、日本文学に於ける近代的様相の本質を観る思いがするのである。

――一九五八・二・十――

註1　明治二九年から三四年にかけての文芸批評誌。季刊。森鷗外主宰。このなかの三人冗語の欄は匿名で、斎藤緑雨、幸田露伴、森鷗外が当時の作品を縦横に批判した。

註2　寿星社刊八四頁「樋口一葉のリアリズム」。

註3　半井桃水の弟浩が、これも親類から預かっていた鶴田たみ子と関係ができ、その間に出来た子を一時桃水がひきとって二人を別れさせたが後に又一緒になる事件があった。それを一葉は桃水とたみ子のスキャンダルと誤解してひそかに桃水を憎んだりする。

註4　日記「筆すさび一」に「みの子の君ものつつみの君とつけて笑ひ給ふに、こと人も、いつしか、さなんいふ。」とある。

宝暦五年「双扇長柄松」の上演について

浅野　達　三

近松門左衛門の書いた「心中天の網島」は享保五年（一七二〇）大阪道頓堀の竹本座での初演以来今日まで繰返し文楽や歌舞伎に上演されている。蓋し着想構成の妙を物語るもので、数ある近松作品の中でも名作と称してよいものであろう。

従つて後になつてこの小春・治兵衛の物語は色々に改作され、「双扇長柄松」、「中元噂掛鯛」、「置土産今織上布」等が出たが、更に安永七年には半二の「心中紙屋治兵衛」が北の新地西の芝居に掛けられ、改作の決定版とも考えられるものとなつた。又増補版「時雨の炬燵」も書かれるに至つた。

「双扇長柄松」は最初に書かれた改作である。然も「天の網島」の竹本座に対して、これはその競争相手である豊竹座の上演である。道頓堀の操り芝居は益々盛んになつて来ており、浄瑠璃も殆んどが合作形式で作られる、と云つた風に種々の点で前作と異る要素を多く持つている。そこで本作が上演された際の諸事実を明白ならしめ、その環境を調査するのが本稿の目的とするところである。

一

上演の事実については次の如く記されている。

古今外題年代記の当流豊竹越前少掾の部には次の如くある。

双扇長柄松　同年七月七日初日操踊
当秋堺へ行三年奥州軍記

同年とは宝暦五年の事である。

浄瑠璃譜の諸事聞書往来下　豊竹芝居の部には

同七月七日初日。　双扇長柄松。　此浄るり不入にて。　一座堺へ引越す。

とあつて興行の成績についても記しているのは興味深い。

外題年鑑　当流豊竹越前少掾の部には

双扇長柄松　同年七月七日
作者　並木永助　豊竹上野
切に操踊。　当秋堺行。　後三年奥州軍記。

とある。但しこの作者名は、宝暦版・明和版・安永版・寛政版と四種ある本書のうち寛政版のみに見られる。

更に、声曲類纂巻之二　豊竹座浄瑠璃外題には

小春治兵衛双扇長柄松
同七月。永介・一鳥・三蔵・三津飲子・黒蔵主・上野。切に操踊。当秋堺へ行。

とあつて作者名は最も詳しい。これは丸本所載の作者名とも一致しているので信じて良い。然しこうなると先の外題年鑑に永助・上野